

広報

あいづばんげ

5 2016 No.621



特集

想いを紡いで

青木木綿の復活を

「青木木綿」という名前を耳にしたことはありますか？

明治中期より広瀬地区で織られ、普段着や仕事着などに用いられていた木綿のことです。

今月号では青木木綿の歴史とその復活に向け取り組んでいる地域のみなさんをご紹介します。



【青木木綿の歴史】

広瀬地区の青木集落周辺は、かつて木綿の生産が盛んに行われ、会津の綿織物産業の中心的存在をなしてきました。

そのきっかけは、明治の中ごろ、青木で木綿の染料となる藍が本格的に栽培されるようになったことです。集落の近くを流れる阿賀川・大川が雨期によく氾濫し、水害をうけて、農作物はいつも損害をこうむっていました。そこで、土地の人々は、水害にあっても損失を受けにくい作物を研究し、藍の栽培を始めました。

江戸時代の会津木綿は主に農家が自家用に織るものが大半で、木綿が商品として売買されるようになったのは、明治初期の紡績糸が登場してからのことです。

青木が会津木綿産地の中心になったのは、藍の栽培が行われていたためと、紺屋へ近村の人々が糸染を依頼してきたことによりますが、棉の栽培や木綿織を会津地方でもっとも早くからはじめたといわれ、青木の木綿は染色がともよいと人気を得ていたからなのでしょう。

青木木綿の特色は、技巧のないすっきりとした縞柄で、主に普段着や仕事着などに用いられました。

つなげたい思い

青木木綿を織っていた澤口福子さんに、当時の様子を伺いました。

(広報)・青木木綿を織っていたのはどのくらい前になりますか？

(澤口さん)・昭和37年に西会津から会津坂下町の青木に嫁いできてその時に旧大和機業(現ヤマト光学)に勤めてからだね。

(広報)・資料で当時の織機などの写真を見たことがありますか、操作は大変でしたか？

(澤口さん)・織り方はほんとうに複雑だからひとつひとつの作業を先輩に教わりながら覚えたね。

もともと個人的に細かい仕事が好きだったから、織る作業は楽しかった。

青木木綿の縞模様は何十種類もあるんだけど、次はどんなふうに織るべって考える時はわくわくしたね。

(広報)・当時、青木木綿はどのように使用されていましたか？

(澤口さん)・当時は、農家の人はみんな「さつばかま」を着て毎日仕事をしていたんだよ。「さつばかま」は昔の作業ズボンのことで、動きやすくして農

作業する時にみんな履いてたんだ。青木木綿で作られた「さつばかま」は快適で夏でも涼しいから、農作業で汗をかいても気持ちよく着れたんだべな。家の中でも部屋着としてよく着ていたよ。

(広報)・青木木綿は当時の生活になくはならないものだったんですね。

(澤口さん)・当時は、喜多方市や西会津町まで青木木綿をたくさん卸していたけど、時代の流れで青木木綿だけでは売れなくなってきた、発色の良い化学繊維を混ぜて織ったり、ニットの生産に切り替えたりして、次第に青木木綿を織ることもなくなりほんとうに寂しくなったね。

(広報)・青木木綿の魅力とは？

(澤口さん)・やっぱり素朴で気軽に使えるとこかな。

そして、なにより丈夫なところだと思う。何年も使い込むことにより、だんだん自分の体になじんできて手放せなくなっちゃうからね。これは今の素材とは違うところだと思うね。

(広報)・先ほども触れましたが、青木木綿を知っている人が減ってしまったことについてどう思いますか？

(澤口さん)・青木木綿には青木木綿にしかない魅力があるから、それがなくなるのはほんとうに寂しい。だから、自分が何かできる間に、当時のことをかを伝えていけたらいいなと思っているね。

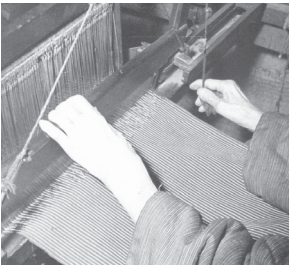
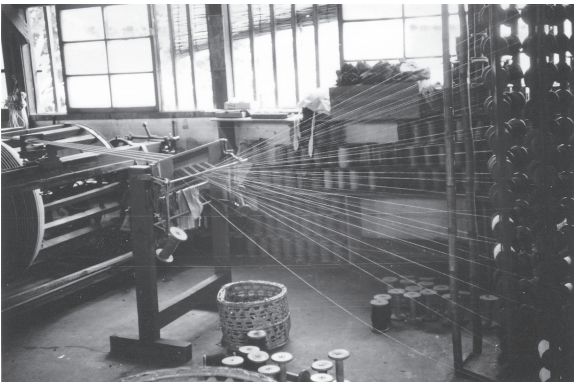
あとは、旧広瀬幼稚園で木綿を使っているいろいろな商品を作っている会社の(株)IIEさんのところに行つて、覚えている範囲で当時の歴史とか織り方を伝えていきたいね。若い人達が一生懸命がんばっている姿を見ると応援したくなるね。

青木木綿をもう一度広めていきたい、知ってもらいたいという気持ちは(株)IIEさんと私も一緒だから、「私が生きているうちは」なんて大袈裟だけど、できる範囲で行動していきたいと思つているよ。

澤口さんありがとうございます。次ページでは青木木綿の復活に取り組んでいる(株)IIEをご紹介します。



青木地区の澤口福子さん。青木木綿の機織りに数十年携わる。「青木木綿は初めはゴウゴウするけど洗うほどに肌触りが良くなってだんだん肌に馴染んで手放せなくなる。まるで会津の三泣きのよう。」



(上) 整経(縞割り)。昭和35年7月青木地区にて。
(左) はたおり。(右) 掛け通し。

受け継ぐ覚悟



株式会社 IIE
代表取締役 谷津拓郎

株式会社 IIE (イー)
福島県会津地域の仮設住宅居住者向けに、地域の伝統工芸会津木綿を素材とした内職事業として平成 23 年秋に設立されました。会津木綿商品の企画・製造・販売を中心に、事務所を会津坂下町青木地区（旧広瀬幼稚園内）に構え、一度途絶えてしまった青木木綿の復活へ向けた取り組みにも尽力しており、地域の人・もの・文化に根ざした企業を目指して活動しています。
HP <http://iie-aizu.jp>

旧広瀬幼稚園に本社を構え、会津木綿を使用した製品の製作・販売を行う株式会社 IIE さんに青木木綿の魅力や取り組みについて伺いました。

青木木綿の記憶を

継承していきたい

(広報)・・・現在、会津木綿を使用した商品を取り扱っている株式会社 IIE さんですが、その中で特に青木木綿についてはどう感じていますか？

(谷津さん)・・・株式会社 IIE は東日本大震災をきっかけに発足したこともあり、青木木綿も水害による被害を受け、地域の人々が生きるために始まった産業なので、強いつながりを感じます。

青木木綿は 30 年程前に一度途絶えましたが、400 年あまりの歴史があり、そこには歴史の中に生きてきた人たちの文化がたまっていると思います。記憶の継承ができるのは当時を生き延びた人が残っているうちだけで、その期限は今が最後だと思っています。

自分は坂下の細工名出身なのですが坂下で生まれ育った人間として、自分たちが地域の文化である青木木綿を復活させたいという強い気持ちがあります。

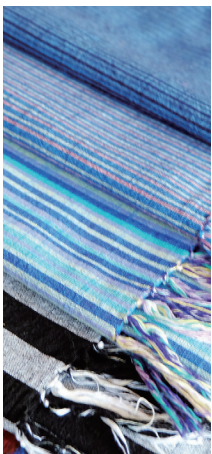
また、歴史や地域の文化を届けていきたいとも思っています。

豊富な色柄には、 時間の蓄積を感じる

(広報)・・・現在では会津木綿を使用した商品を製作し販売していますが、会津木綿の魅力について教えていただけますか？

(谷津さん)・・・まず、色柄が豊富であることですね。昔ながらの縞でありながら、今の時代の感覚にも合い普段使いできることが特徴です。今のようないざいソフトもない中で、たくさんの職人さんたちの手によって作られてきた柄には時間の蓄積を感じます。

次に、他の木綿生産地であれば、効率化を図るため染め、織り、経糸づくりなどが分業化されているのが普通ですが、青木木綿や会津木綿の場合は織元ですべての工程を行っているのが一つの特徴です。そこから言えるのは、外に向けた大量生産のものではなく、庶民のための布として、地域でつくり地域の方たちが消費するいわゆる「地産地消」であるということです。大量につくらない、ちょうどいい生産量いわゆる「中量生産」というのは、自然との共生という震災後の価値観と合致していると思っています。



(広報)・木綿の素材についてはどう感じていますか？

(谷津さん)・まず、日常使いができて、使いやすく長持ちすることですね。天然素材の綿できており、手仕事の延長にある機械で作っていることもあって、人のぬくもりが感じられます。

「会津の三泣き」のように、最初はごわごわしていますが、使っているうちにやわらかくなり、最終的には使っていないと不安になるくらいなじんでいく。会津人の気質そのものを表しているように感じます。

モノには、土地柄、人、気候が現れるものだと感じていて、そういった点では、青木木綿は真面目で実直な農作業布という印象をうけますね。大量生産大量消費の時代に、大きな震災があり、従来の考え方が見直される中、青木木綿・会津木綿の背景を通して、これからの暮らし方の提案ができればと思います。



通気性、保温性に優れ、1年中使える会津木綿ストール。

(広報)・青木木綿復活に向けた今後の取り組みについてお聞かせください。

(谷津さん)・青木集落周辺は、地域で一丸となって棉の生産をしていたことが一番の特徴で、周辺地域一体が青木木綿の生産地になっていました。このような地域の歴史がまった青木木綿文化が、ただ忘れられていくだけではもったいないと思っています。自分たちが何か行動することで、青木木綿に携わっていた方々に今までやってきてよかったですと思ってもらえたら幸せです。

また、地域で育んできた歴史・文化を若い視点で自分たちが肯定し、それからの活動を通して内外へ発信していきたいです。

今後は広瀬コミュニティセンターとも連携して、青木木綿について知りたいという人たちがこの地に集まってくるようになったらいいと思います。



約百年前に開発された豊田式織機株式会社の織機。

現在、青木木綿の織元であった旧ヤマキ織物工場さんより譲り受けた織機を整備しているところですが、同じく会津で一番古い歴史のある織元の旧大和機業の佐藤義光会長をはじめとした地域の方々にご支援いただきながら、この歴史ある織機を使って伝統の青木木綿の復活をめざします。

今後もスタッフ一同、よろしくお願

いします。

(広報)・谷津さん、そしてスタッフのみなさん、ありがとうございます。

時代の流れに取り残され、ひっそりと忘れ去られようとしていた青木木綿。先人たちの残した素晴らしい文化を継承しようと、奮闘するみなさんの想いの一端に触れることができました。

今、青木木綿を取り巻く人たちの想いが紡がれ、青木木綿の復活に向け、動き出しています。



(株)IIEには旧ヤマキ織物工場より譲り受けた織機がずらりと並び、ひとつひとつさびを落とし整備している。

青木木綿の復活を応援する人たち



(株)ヤマト光学
(旧大和機業)
佐藤 義光会長

谷津さんの青木木綿を継承していきたいという強い気持ちと、一から織機を整備し復活させていきたいという姿勢に感激しています。

これからも私のできる範囲で、青木木綿の歴史や織機の技術について伝えていきたい。応援しています！



広瀬コミュニティ
センター長
高野 元嗣さん

文化祭のときなどに出品される(株)IIEさんの商品は、地域の方からも大変好評で、これからもぜひ続けてもらいたいです。今年度は、(株)ヤマト光学さんから寄贈いただいた織機を展示する予定です。青木木綿を地域活性化の一つにつなげていきたいです。